蜷川幸雄 × 蜷川実花

YUKIO NINAGAWA × MIKA NINAGAWA

〔財〕埼玉県芸術文化振興財団芸術監督・演出家

写真家

公開対談シリーズ 第5回

NINAGAWA 千の目（まなざし）

「NINAGAWA　千の目」の5回目のゲスト、写真家の蜷川実花さんは
初めての女性ゲストであると共に、周知のとおり、蜷川幸雄の長女。
今まで親子対談の企画は数々あったものの、「はずかしくて」（蜷川幸雄）
ほとんど実現せず、公開では本邦初の顔合わせとなった。
初めての長編映画『さくらん』を監督し、来年2月に公開を控える実花さんに対し、『青い炎』や
『噛う伊右衛門』などで映画監督としても一日の長がある蜷川幸雄はどう出るか。
シャイな親子の“緩衝地帯”として、映画や演劇、ダンスのライター、
佐藤友紀さんを進行役に迎え、注目の対談は始まった。

色彩感覚も、カット割りも、映像は俺よりずっといい

佐藤（以下S）「千の目」第5回のゲストはフォトグラファーで、今度は映画監督をなさいます蜷川実花さんです。そして芸術監督の蜷川幸雄さんです。（2人、登場）

実花さんはもともと写真を撮りながら、どこかでは動く映画をいずれかは撮りたかったのですか。

蜷川実花（以下MN）　私は映画を撮りたいというのは全然なかったのです。写真より映画の方がすごいとも思っていないし、写真は表現する事はやればやるほど深くなるのです。ですが、映画会社の方から「何かやりたい原作があったら一緒にやりませんか」と言われていて、1、2年かけて、これだったら私の力を出せる所があるかも知れないと思ったのが、今回の『さくらん』です。普段だったら、いろいろな撮影とか取材を受けたり、家に帰って話したり、スタッフとかに話したりする時に、いろいろな蜷川実花を使っているつもりですが、全部の蜷川実花が全員集合して、しかも120パーセントの全力投球でやってもやっても足らないかもというぐらい監督って大変なんだという事がすごく面白かったです。

S　では、記者会見の様子と、これも本邦初公開の撮影風景を収めたビデオを、特別に見せて頂くことにいたしましょう。

（ビデオ上映）

蜷川幸雄（以下N）　おお、俺よりいいなあ。

MN　まだ出せるのはこれだけなんですよ。（拍手）

S　実花さんの映像は、写真でも本当に蜷川実花しか出せないピンクの色とか、先ほどの映画の色も吉原の雰囲気が、綺麗というか、華麗な色に集約されそうで楽しみなのです。

N　そうですよね。インターネットでやった映像の作品を見ても色彩感覚が違います。僕よりもはるかにポップで、カット割りも細かいし、「ええ、ここへ飛ぶのか」と、僕の世代と明らかに違う。それはわりと客観的だと思います。映像は僕より確かにいいです。編集もカット割りのタイミングも早いし、俺の方がちょっと遅いかな。

S　ジム・ジャームッシュ監督なんかはオレンジ色が大嫌いだそうですが、嫌いな色ってありますか。

N　僕はオレンジはやだなあ。僕の舞台にオレンジが出てきたことはほとんどないと思う。

MN　私は茶色が嫌いで、時代劇は一般的には生地色の家具がいっぱいあるので、それは絶対にイヤだといって全部黒にしたので、『さくらん』には生地色、いわゆる茶のタンスとか、柱とかは一本も出てこないのです。わりと浮世絵をベースに主に春画から、すごくハデなタイプの春画から引っ張ってきたのです。『さくらん』の舞台の江戸時代に誰も生きていたわけでないので、浮世絵だったりとかの文献を見て誰かがイメージし、それをまた見て、というその間が一切いらないと思い、浮世絵と私のフィルターを通して、アウトプットできたらそれでいいというルールにしました。

S　ところで、蜷川家で育つということについて、何万回質問されたと思いますが、「うちのお父ちゃん、何かスペシャルな事をしているみたい」と感じたのはいつ頃でしたか。

MN　本当に小さい頃から四谷シモンさんの人形が（家に）あったりとかで、「この人形はなんでパンツを履いていないのかな」と思ったり、でもこれも可愛いし、ロボコンも、リカちゃんも好きだし、横尾忠則のおじさんの絵も好きだし、このぬりえも好きというような、すごくフラットでした。それが特別な事というのではなくて、ごっちゃになっていたけど、それはすごく良かったのだと思います。特別な人なんだと思った記憶はないですが、ただドラマを見ても私は未だにテレビとか、映画とか、ドラマを一視聴者として見られないのは、父と母のせいだと思っています。見ていると「何だよ、カメラ寄りすぎだよ」とか「顔だけで芝居しやがって」とか、「本当に下手ねえ」とか、小さい時からそういう家庭に育っていました。「食べ物を食べている口元を写すな」とかはすごく言っていました。

左から蜷川幸雄、進行役の佐藤友紀さん、蜷川実花さん。

S　「食べ物を食べている口を写すな」で思い出しましたが、北野武監督が食べるシーンを自分で撮るのはとても苦手だそうですが、映画監督のお二人はそういうのはありますか。セックスを撮るよりも食べるシーンを撮る方が難しいとか。

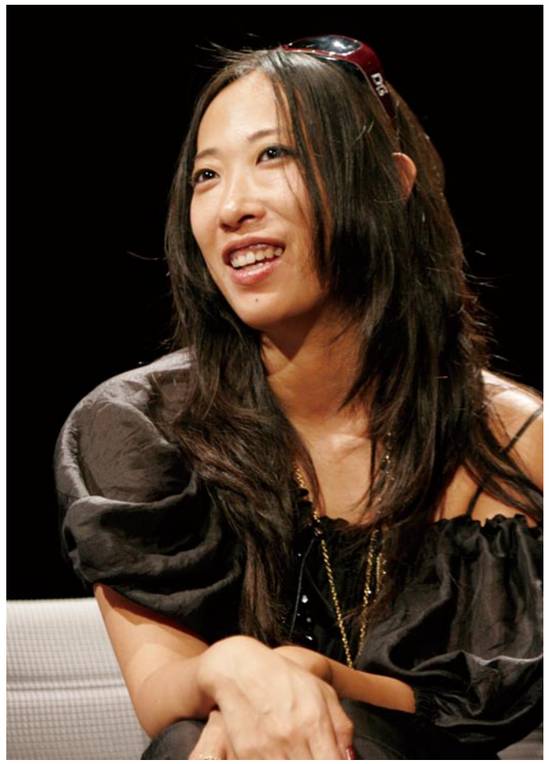
N　僕の『青の炎』で鈴木杏さんが二宮（和也）くんの妹の役でしたが、そういう兄弟が二人でいる部屋は撮れないですね。僕はホームドラマみたいなのはダメなんです。そういうシーンを撮るのがはずかしいのだと思います。ホームドラマみたいにご飯を食べている所とかは撮りたくないのですね。「イヤだなあ」と思いながら撮っているのでカット割りもよくないし、そういう所も下手です。

MN　私が監督した作品の中で、吉原から足抜けをするシーンがあって、ある意味では映画で重要な所でもあるので一応撮りましたが全部カットしました。説明的な事とかはすごく飛ばしたくなるのです。

得意だったのは、ラブシーンが得意でした。すごくしつこいのですよ。（笑い）　特に男の人に対してうるさくて、「もっとこうして欲しい」とか、「女だったらこうして欲しい」とかをすごくこだわっていたみたいで、椎名桔平さんにまで、「手はこうして下さい。こうでなくて、こうです」とか。

photo:幸田 森　構成：鴨澤章子

蜷川実花として認識してもらおうと、5歳ぐらいから焦っていたのがよかった。



蜷川実花　Mika Ninagawa

1972年東京生まれ。多摩美術大学グラフィックデザイン科卒業。「第9回写真3.3㎡展」グランプリ（96年）、「第13回キャノン写真新世界」優秀賞（96年）、「第9回コニカ写真奨励賞」（98年）、「第26回木村伊兵衛写真賞」（01年）、「大原美術館賞」（06年）など数々の賞を受賞。主な写真集に『Acid Bloom』（03年）『Liquid Dreams』（03年）『mika』（04年）『floating yesterday』（05年）など。現在は様々なファッション誌や、CDジャケット、広告を中心に、写真集や展覧会での作品発表で活躍中。初の長編監督映画『さくらん』が来年2月、公開予定。写真集『永遠の花』（小学館）発売中。トーキョー ワンダーサイト 渋谷（開催中～11月26日）、小山登美夫ギャラリー（11月17日～12月9日）にて個展同時開催。http://ninamika.com（PC）　http://ninamika-m.com（モバイル）

N　俺はないなあ。はずかしくて。僕はラブシーンはカメラを引いてワンカットで撮ってしまいます。

S　実花さんは今回が演技をつけるのは初めてで、それを自分が出来てしまうというのは、門前の小僧なのでしょうか。

MN　やる前は本当に出来るか一番不安な所でしたが、みんなにはすごく出来ていたと言われました。出来ていたとしたら何でかなと思いましたが、例えばすごくおいしいご飯を毎日小さい頃から食べていた子だとして、トマトの本当の味はこれだ。塩はこれとこれは違う。お醤油だったらこれがある。それを組み合わせるとこうなるという経験値があって大人になったとして、その子がお料理を作る事は出来なくても、出てきたお料理に対して「ちょっと塩味が濃くない？」という、ある味の基準値は持っているのではないかと思います。私は父の舞台を観ていないのがたぶん2、3本というぐらい、小さい頃から本当によく観ているので、もしかしたら子供の時から、こういうものがいいものなのだという、演技に対する基準値が身についているのかなと思います。

これだけやっている人が身内にいると驕ることが絶対に出来ない

S　蜷川さんは来年上演する予定の舞台は11本ですね。とんでもないですよね。

MN　11本もやるというのに来年で72歳でしょう。私も忙しいけれど、「忙しくて偉いね」「すごくやっていて偉いね」とか、いろいろと言われても、これだけやっている人が身内にいると驕ることが絶対に出来ないのです。「私ってすごいんだ」とか、自分の実力以上に勘違いしたりとか、みんなにちやほやされていい気になりようがないのです。それはすご～く重要で、そこが絶対にぶれないというのが一番大きな財産かなと思っています。

N　そんなことを考えているんだ。初めて知ったよ。

S　照れていますね。お父様、お母様の名前が知られているというと、どうしても親の七光りがどうとかがでてきて、反発するし、気にしないというフリをするのも不自然だし、とすごく大変だと思いますが、そこがニュートラルにこれたというのはなぜでしょう。

MN　「蜷川幸雄の娘」ではなく、蜷川実花として認識してもらうにはどうしたらいいのだろうと、たぶん5歳ぐらいから焦っていたんですが、それがかえってすごくよくて、焦るというのはすごく重要な事だと思います。それは私の中で大事なキーワードです。焦るからこそ早く、私だったら写真に出会えたり、蜷川実花とは何なのだろう、蜷川実花として認識してもらうのにはどうしたら、というように、人よりは多くのプレッシャーがかかっていたことは、それはすごくラッキーだと思います。

私は女だからかな。男の子だったらいろいろな反発があったのかも知れないですね。

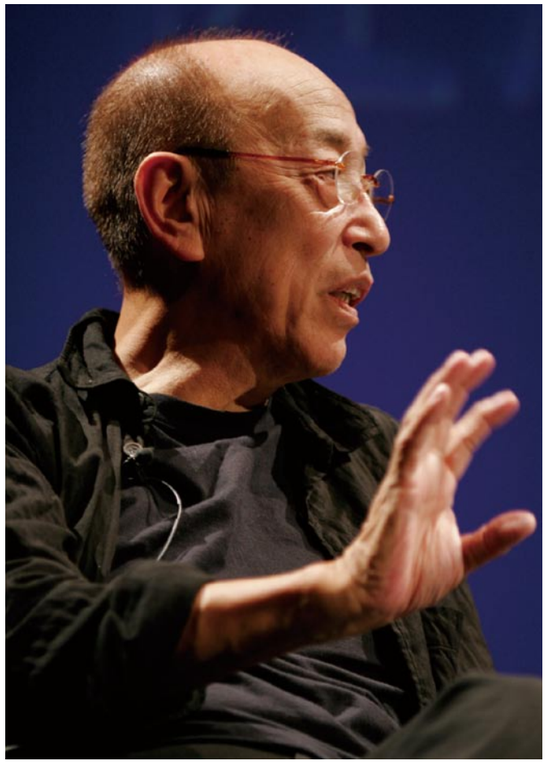
N　この世界では知名度がある父親を持っていてプラスになることはないし、それでチャンスが来ることも絶対ないし、マイナスの要素の方がはるかに多いと思います。娘には何の手助けもしなかったし、周辺に父親の影を感じさせないように気をつけていました。勝手に自分で応募して、勝手に写真家になったのです。私は娘が、好きなものを自分で見つけて本当によかったなあと思います。

思えば、小さい時に散歩に行って彼女が写真などを撮っていると、「何であいつはそんな所を撮っているのだろう」というような感じでした。花にばかり寄っていたり、よく雑草みたいなものを撮ったりしていましたが、もっとあっちを撮ればいいのになあとか、変な所を撮るんだなあと思っていましたが、作品が上がって見ると「ああ、そうなのか。人によって景色の中で選ぶものがこんなに違うんだ。これは僕の何かを押しつけたりはしない方がいいのだな」と思ったので、写真のことについては一切口出しはしていないと思います。娘に「どう？」と聞かれれば、「いいねえ」ぐらいで、その他の感想はほとんど言ってないと思います。

S　そのお父様の態度はいまにして思うと助かりましたか。

MN　多分必要以上に自意識がお互いあって、私の展覧会の初日も未だに絶対来ないですし、仲はいいのですが、二人でここにいる（公開対談している）こと自体が不思議です。ここは父にとって大事な聖域だと思うのです。生まれて初めて父親の稽古場に行ったのは、私が32歳の時で、それまでそこは絶対的聖域で入れない所だと思っていました。完璧に一人前になったらいつかは見に行きたいと思っていた所ですが、その時は丁度映画をやるのが決まって、父は一体どんなふうに演技をつけるのだろうと思って行きましたが、すごく怖くて、その意味では参考になりませんでした。32歳になるまで足を踏み入れられなかった境界線が、家族だからより強くあると思うのです。だからたぶん父も私の写真に関しては本当に「いいね」とか、私もお芝居を観て「面白かった」しか言わないんだと思います。

娘が好きなものを自分で見つけて本当によかった。



蜷川幸雄　Yukio Ninagawa

埼玉県川口市出身。シェイクスピアはもとより、ギリシャ悲劇から日本の古典・現代劇まで幅広く手がけ、数々の名舞台を世界に送り出している。昨年も『近代能楽集』ニューヨーク公演、歌舞伎『NINAGAWA十二夜』、『メディア』、『天保十二年のシェイクスピア』など多数の演出を手がける。まさに世界を舞台に疾走し続ける演出家。2006年、第5回朝日舞台芸術賞特別大賞、第13回読売演劇大賞・大賞、最優秀演出家賞受賞。（財）埼玉県芸術文化振興財団芸術監督。

自分に対する厳しさが、クリエーター同士の共通点

S　こうなってくると11本を1本1本全力投するしかないですね。

N　大丈夫なんですかね。才能が音を立てて消えるのです。「ああ、だめだあ。失敗した」というのがあるのです。演出家は俳優に質問されたらとりあえず何でも答えなければいけないと思いますが、僕は立ち往生したら演出を辞めようと決めています。説得力のある言葉でその場をしのげなかったり、イメージが出せなかったりしたら、チームが崩壊します。来年いっぱいはメチャクチャやっちゃおうと思っているから、今はだからいいのです。カキカキと目が覚めています。

S　音を立てて崩れていくというのは、どんな音だと思いますか。

N　最近の仕事も自分でも「ああぁ！あそこは何にもやっていないな」と思ったので、それは危機感があります。だから（9月にシアターコクーンで上演した）『オレステス』はどんな劇評があろうと誰が何と言おうと、世界のトップクラスの仕事をしていると僕は自分で思っています。それはどう考えるかというと、ウェストエンドやブロードウェイ、イギリスだったらナショナル・シアターでもいいが、世界の第一線で仕事をしている演出家達の作品が並ぶ劇場に自分の作品を入れてみる。そして反対側の歩道橋からそれを眺め、看板を見、中に入り、出てきて、それの一番いいものと比べた時に「ああ、大丈夫だな」と思っています。

S　お父様の話を聞いていて、もちろん作っているものは違いますが、同じクリエーターとしてやはりそういう苦労とかはどうですか。

MN　本当に深く頷けるというか、私は、自分のことを一番厳しく、一番低い点数をつけられる自分になりたいと思いますし、出来るだけ俯瞰で自分のことを見たいし、同時に一番自分を信じ、褒めるのも自分でいたいし、絶対的な自信と一番「ここ、ちょっとほこりがあるんじゃないの」と見れられるぐらいの、両極が欲しいのです。真ん中は全然いらないです。両方が欲しくて、その両方がチェックできていればいいなあと思ってやっています。舞台よりも、1回1回の撮影が短いので、すごくチェックすることが多いのです。一つでも「この間やったこととちょっと似ていることをやってしまったな」と周りが気づいていなくても自分で気づくことがあるので。今、気づきましたが、こういう気質は父からきているのだなあとすごく思いながら聞いていました。

S　今日は親子の間でも初めて知ったこともたくさんあって、とても刺激的でした。ありがとうございました。

2006.9.22　彩の国さいたま芸術劇場 小ホールにて